

隋から続くよ いつまでも



今日は、1・2年生の実力テスト。一方で3年生は、もうすでに私立高校の推薦入試が始まり、今日も試験を受けている人たちがいる。君たちを悩まし続け、これからも悩まし続けるであろう「試験」。誰が、いつ頃考えたものなのか？ 夢色通信社では様々な資料を基に、ようやくその歴史をひもとくことに成功した。時代をさかのぼること今から1450年前、古代中国の隋から始まった「科挙」というものが浮かび上がってきた。

「科挙」とは、隋の時代から清の時代まで1300年も続いた、能力のある役人を選ぶための制度で、「試験科目による選挙」ということから「科挙」と呼ばれるようになった。試験の倍率は3000倍とも言われ、近代ヨーロッパの手本となったとも言われている。日本では、明治時代に入り、「科挙」の制度が参考にされたという。「科挙」は誰でも受験することができた。年齢、出身地は関係ないが、女性はダメだったらしい。試験は3年に1回。3段階の試験がある。最初が「郷試（きょうし）」で、これは地方の試験。合格したら都で二次試験を受けることができた。これを「会試（かいし）」という。「会試」を通った受験者が最後に受けるのが「殿試（でんし）」。皇帝自身による面接試験である。宮殿で受けるから殿試。受験者は50万人。それに対して最終的な合格者は300人程度だったそうである。どんな試験をするのかというと、すべて論述。科挙の試験というのは、人格を測るようなところがあるので、字がきれいなことも要求された。今みたいに鉛筆、消しゴムなどはない。墨をすって筆で書く。清書用紙を墨で汚したりしたら、まずそれで不合格となる。しかも、試験は3日間ぶっ通しで行われる。試験会場は鶏小屋みたいになっていて、受験生ひとりひとりに独房（どくぼう）が割り当てられる。鍋や釜、食料、ふとんも持ち込んで、食事を作りながら答案を書くのである。なかには、緊張に耐えきれずに発狂する受験者もいたそうだ。

合格するためにカンニングをする者もいたそうで、その対策もとられていた。解答用紙を採点するときは、受験者の名前を隠すだけでは不十分。受験者の筆跡で誰かが分かる場合があるので、筆跡を分からなくするために受験者の提出した答案を役人が書き写し、筆跡が分からなくなったものを採点官が見るというやり方をとっていたという。それでも、「私の答案は二枚目の五行目の三文字目に「仁」という字を書きます。」というふうにしておき、不正を企む者もいたというから驚きである。科挙の試験に合格した者の家は、特権を得ることができた。税金を免除されるのである。だから、少し賢そうな子どもだったら親戚みんなでお金を出し合って、良い先生のところに入門させて科挙の準備をさせる。子どもは一族の期待を一身に背負って勉強するので、プレッシャーも大きかったという。

これを考えれば今時の試験なんて・・・？

3年生・受験の流れ

1/13～1/25	私立高校推薦入試
1/28～2/2	私立高校一般入試
2/5	公立高校推薦入試
3/10	公立高校一般入試